

委員会報告

デザイン部会

対照的な建築の味

法隆寺宝物館と芸大美術館見学会



デザイン部会 連 健夫

デザイン部会主催(大野部会長)の見学会が、昨年11月17日に開かれた。当日、住宅部会からの参加者もあり総勢23名となった。スケジュールは、半谷氏(V設計室)のアレンジにより、1時半から東京国立博物館法隆寺宝物館を見学、その後東京藝術大学大学美術館を見学し、谷中の路地裏散策、最後には古き木造3階建ての「はん亭」にて懇親会という充実した内容であった。

宝物館は、法隆寺の数多くの遺品を保管、展示するため昭和39年に開館した施設であったが、その後、公開日の増加の声の高まりを受け、同じ場所で規模を大きくして建て替えられたもので、設計は谷口吉生氏、平成7年に着工し、平成11年7月20日に開館された。つまり、新しい宝物館は、大きく保存機能と展示公開の二つの目的を持った施設といえる。設計担当者の棟尾氏(谷口建築設計研究所)から説明を受けて見学をすることができた。建物は大きく、ベージュ色の直方体部分と全面のガラス部分の二つで構成される。氏の説明によると、保存機能をライムストーン貼の直方体部分に表現し、公開機能をガラスのカーテンウォールで表現したとのことである。これらに日影をつくるためにステンレスのキャノピーを設けるという、単純かつ明解な構成を目指したとい

う。確かに、いたるところに単純性が見られる。興味深いのは材料の質感を意識して消していることである。ドイツ産の厚50ミリのライムストーンはカードボードのようにプレーンに貼られており、その石の質感が遠くからでは感じられない。触れてみてやっと感じるくらいである。展示室内部の濃いグレーの壁材は、見るだけではもちろん触ってみても何かが分らない。氏に聞くと、ジュラク塗壁とのことである。手塗の跡がまったくなくクロスかボードのような表情である。ディティールについても、できるだけ不必要なものはとり、納まりを単純化している。もちろん、単純化すればするほどその納まりは難しくなるが、見事に納まっている。従って、全体として導入部の軽快さと展示部の重厚さとのコントラストの面白さと同時に、展示物があくまで主体であるという建築の控え目な意思が、感じられる建物である。

芸大美術館は、この点では対照的である。外壁を例にあげれば、地面に接する1〜2階は赤砂岩の割肌、上層の3階部分はアルミキャストのパネル貼り、上下を繋ぐ構円体のシリンダーは白亜影貼の三つの主要な素材の質感が、離れていてもはっきりと感じられる。つまりこれは材料の使い方としての正直性である。宝物館は、この意



法隆寺宝物館の前で概要説明



法隆寺宝物館、明るい2階キャノピー部分

味では哲学的使用といえよう。材料の資質を活かしつつ、その存在を主張せずあくまで材料が客体になっているのである。芸大美術館の見学では、設計者の六角鬼丈氏に話をうかがうことができた。この美術館をファクトリーミュージアムというコンセプト、すなわち制作現場と展示場で捉え直し、キャンパス全体を美術館を含めて総合的に環境と施設整備を行っていくという基本方針のもとに設計されたとのことである。学部からの様々な要求に答えるために、タフな建築を目指し、床、壁に釘やアンカーが自由に打てるような仕様としている。この姿勢は、建物全体に貫かれており、結果として、気取ったいやらしさがなく、用に答えた空間として意識できる。予想外のこととして、その訪問者が多く、入るまでの待ち時間が長い、トイレの数が少ない、混んでいて人とぶつかるなどの苦情があるとのことである。これは建築の問題というよりは、芸大所蔵美術品の魅力、宣伝の具合によるものであろう。残念だったこととして遊びの空間が取れなかったと氏の説明があったが、外部空間と連続した食堂の賑わい、帰り際に見たエントランスホールの音楽コンサート活動など、限られた面積で多様で魅力的な空間を生み出しているように思えた。空間の扱いと材料の実直性が、その活動を生み出しているのではないか。個性



芸大美術館、六角氏より説明を受ける。

的な外観の形もシンプルで格調高い宝物館とは対照的である。建物自体が明確に主張することにより、芸術のエネルギーを感じさせ、刺激を与えることになるのではないかとポジティブに受け取ることができた。この二つの美術館を同日に見ることをお勧めしたい。体験の中で浮き彫りになる建築の特質を楽しむ?には、魅力的な組み合わせとと思う。<ムラジ タケオ・(有)連健夫建築研究室 主宰>



芸大美術館、1階エントランスホールでは音楽会などの催物が随時行なわれている。



芸大美術館、赤砂岩の壁面によりパースペクティブを感じる